

# 鉄条網のなかの浄土真宗

— 日系アメリカ人強制収容所における仏教伝道 —

釋 氏 真 澄

## 1、はじめに

1899年に創設された本願寺派のアメリカ合衆国本土での伝道教団である米国仏教団<sup>1</sup> (Buddhist Mission of North America <BMNA>、現 Buddhist Churches of America<sup>2</sup> <BCA>、以下「教団」) は100年以上の歴史を持ち、その存続の中でアメリカ化という現象が起きている。ここでいうアメリカ化とは具体的に、①教団組織の超宗派仏教 (Nonsectarian Buddhism) 化<sup>3</sup>、②教学の通仏教 (General Buddhism) 化、さらに③儀礼と伝道のアメリカ的用語 (American Terminology) 化と定義しておくが、筆者は別稿にて現代の日本とアメリカでの教学の傾向の違いに関して言及した<sup>4</sup>。特に通仏教に関してアメリカでは寛容であり、八正道や六波羅蜜などの実践を大切にしながら、宗祖の顕された阿弥陀仏の救いを重ね合わせるという英語伝道の手法がよく用いられていることは、具体的特徴としてあげられるであろう。

アメリカの浄土真宗に関する先行研究は、現在のところ戦前に関するものが多くを占めており<sup>5</sup>、戦時中に関しては管見の及ぶ限りまだ研究が進んでおらず日本でも紹介されていない領域であると思われるが<sup>6</sup>、本稿では浄土真宗のアメリカ化を考察するにあたり、日系人<sup>7</sup>のアメリカ化の転換期となった太平洋戦争時における日系人強制収容所<sup>8</sup> (Concentration Camps、以下「キャンプ」) 内の英語伝道について検討する。

戦前の各仏教会の礼拝や活動（仏青以外）は一世が支配し、日本語による儀礼や伝道、そして会議が中心であったが、キャンプでも継続された仏教会（以下「キャンプ仏教会」）の活動では、二世の活躍がめざましくなり、本格的な英語による儀礼と伝道<sup>9</sup>、そして会議が始まった転換期となった<sup>10</sup>。

本稿の研究方法としては、まず諸資料<sup>11</sup>をもとにキャンプ仏教会や開教使に関する情報をまとめ、仏教青年会（Young Buddhist Association 〈YBA〉、以下「仏青」）会員であった二世への英語での真宗伝道について注目し、キャンプ内での英文仏青発行物<sup>12</sup>に掲載された法話や仏青会員の記事を検討してその特徴を探る。そしてそれらの特徴の形成過程についても検討を加え、戦時中という日系人の価値観の転換期における浄土真宗のアメリカ化の実際とその背景を考察したいと思う。

## 2、戦時下の教団とキャンプ仏教会

1941年12月7日（米国日付）日本海軍によるハワイへの真珠湾攻撃により、教団の歴史は大きな転換期を迎えた。アメリカ西海岸沿岸部では予告なしに、教団開教使<sup>13</sup>を含む日系人コミュニティの指導者たちが、連邦刑務所等に次々と逮捕・抑留された。翌年、アメリカ西海岸とハワイの一部の地域に住む12万313人もの日系アメリカ人は、その7割がアメリカ生まれの二世であり市民権を持っていたにもかかわらず、政府によって強制立ち退きを命じられ、家や土地などの財産を手放し、両手に持てるだけの所持品のみで16ヶ所の集合センター<sup>14</sup>にまず短期間拘留され、のちに戦時転住局（War Relocation Authority、以下「WRA」）が管理する10ヶ所のキャンプに収容されることになった。強制収容により教団の45の仏教会中、西海岸の40の仏教会は閉ざされ、その建物は強制収容された仏教会メンバーの荷物保管場所や、アメリカ政府・軍の施設、キリスト教施設や他の住民の住まいとして使用され、

立ち退き前に建物を管理する人<sup>15</sup>を運良く見つけられた仏教会もあれば、放置されて盗難や破壊、放火の被害にあう仏教会もあった<sup>16</sup>。しかしキャンプ内では宗教活動が許可されており<sup>17</sup>、戦前から日系人の間で最大勢力だった本願寺派<sup>18</sup>をはじめ、他の仏教宗派<sup>19</sup>やキリスト教の教団による伝道活動がおこなわれていた<sup>20</sup>。そして終戦後、WRA はすべてのキャンプを閉鎖した。

以下に戦時中の教団の状況を把握するために、キャンプ仏教会<sup>21</sup>・フリーゾーンの仏教会<sup>22</sup>・司法省管轄の抑留所<sup>23</sup>と、そこに駐在・滞在していた開教使名の一覧を諸資料<sup>24</sup>をもとに表にまとめる。

## 強制収容所とキャンプ仏教会

	仏教会名	駐在開教使	収容所名	最大収容数	収容期間
1	Gila Camp#1 Buddhist Church 比羅第一館府仏教会 比羅第二館府仏教会	北条恵美・木村義文 藤永覚眠・今村寛猛・増永大見・松浦逸清・山本義弘	ヒラ・リバー(リバース) (アリゾナ州)	13,348	42.7.20 - 45.11.10
2	Granada Buddhist Church グラナダ仏教会★	白川沢雄・米村尹周	グラナダ(アマチ) (コロラド州)	7,318	42.8.27 - 45.10.15
3	Heart Mountain Buddhist Church ハート山仏教会	麻生主税・香静海	ハートマウンテン (ワイオミング州)	10,767	42.8.12 - 45.11.10
4	Idaho Buddhist Church ミッドカ真宗教会	西永義貴・柴田徹信・杉本法順・寺尾英雄	ミッドカ(ハント) (アイダホ州)	9,397	42.8.10 - 45.10.28
5	Manzanar Buddhist Church 満砂那仏教会	水富信常	マンザナア (カリフォルニア州)	10,046	42.6.1 - 45.11.21
6	Poston Camp#1 Buddhist Church ポストン第一館府 真宗仏教会 ポストン第二館府 真宗仏教会 ポストン第三館府 真宗仏教会	升岡隆英・長藤行精 藤村文雄・岩永義雄 川崎是正・酒生章秀	コロラド・リバー(ポストン) (アリゾナ州)	17,814	42.5.8 - 45.11.28
7	Rohwer Buddhist Church ローア仏教会	早島大徹・水谷賢寛	ローワー (アーカンソー州)	8,475	42.9.18 - 45.11.30
8	Topaz Buddhist Church トパズ仏教会 【Headquarter 教団本部】	鹿島哲郎・京極逸蔵・本好乗晋・岡山善海・真田去山 【松陰了諦総長】	セントラル・ユタ(トバース) (ユタ州)	8,130	42.9.11 - 45.10.31
9	Tule Lake Buddhist Church 鶴嶺湖仏教会	安孫子義孝・赤星真月・平林暁祐・岩男憲之・甲斐知鴻・毛利令知・松本徹昭・永谷清人・内藤照善・大野静哲・小野山精城・佐々木千象・玉那朝見洋・鶴山達也・海野円了	トゥール・レイク(ニューエル) (カリフォルニア州)	18,789	42.5.27 - 46.3.20
10	Jerome Buddhist Church ジェローム仏教会★	(閉鎖後：甲斐→トゥール・レイク、河野→シカゴ)	ジェローム(デンソン) (アーカンソー州)	8,497	42.10.6 - 44.6.30

## フリーゾーンの仏教会

	仏教会名	駐在開教使
1	Chicago Young Buddhist Association シカゴ仏教青年会(イリノイ州)	河野行道(44.7.10創設)
2	Denver Buddhist Church デンバー仏教会(コロラド州)	玉井好孝・角田昇道
3	Fort Lupton Buddhist Church ラプトン仏教会(コロラド州)	板原顕示
4	New York Buddhist Church ニューヨーク仏教会(ニューヨーク州)	石浦入通
5	Ogden Buddhist Church オグデン仏教会(ユタ州)	久間田頼了
6	Salt Lake Buddhist Church ソルトレイク仏教会(ユタ州)	寺川澄然

## 司法省管轄の抑留所

	抑留所名	抑留開教使
1	Santa Fe Detention Station サンタフェ(ニューメキシコ州)	小坂悠慈・桑月文方・前田祇静・前原晃郎・重藤内亮・田名大正
2	Crystal City Internment Camp クリスタルシティ(テキサス州)	藤井竜智・藤門芳信・市川達也・西居弘誓・沖田美義・島川秀雄・轟至誠
3	Camp Keesick クースキア(アイダホ州)	関法善

強制収容前に教団には67名<sup>25</sup>の開教使（総長含）が所属していたが、一旦  
抑留所に入ったもの<sup>26</sup>も含め51名がキャンプ仏教会の布教にたずさわり、3  
名<sup>27</sup>はフリーゾーンの布教のみに従事し、13名は司法省管轄の抑留所内で過  
ごした。サンフランシスコの教団本部にいた松陰総長<sup>28</sup>や本部職員はトパー  
ズに収容され、教団本部が設置された。1942年に教団本部は、「キャンプ教  
会に関する規定<sup>29</sup>」を定めており、組織をあげたキャンプ内での積極的な伝  
道姿勢がうかがわれるが、開教使たちはWRAが推奨したキリスト教伝道に  
対抗し<sup>30</sup>、キャンプ仏教会にて日英両語の日曜礼拝・法話会・勉強会、仏  
青・日曜学校・婦人会などの活動を実施した。また開教使の本部宛の書簡<sup>31</sup>  
には、布教や生活の状態が報告されており、逮捕・抑留そして強制収容とい  
う非常事態の中、たとえ立派な本堂がなくても、日系人が仏法を聞くには精  
神的・物理的両側面において最適な環境にいると捉え、毎日の信仰相談や礼  
拝・法話で精神を支えることに全力を投じ、真の宗教者としてのよこびを  
発露するような言葉がみられる。また幾人かの開教使の書簡<sup>32</sup>には親鸞の流  
罪と自らの境遇を重ね合わせ、「苦勞を体験させていただき、仏法に深く目  
覚める機縁であった」と、感謝の言葉さえ述べるものもある。

### 3、戦時下での日系二世と仏教の実際

～開教使法話と仏青会員記事より～

戦時中教団には、久間田顕了、石浦入遁、角田昇道、今村寛猛という4名  
の二世開教使がキャンプ内、およびフリーゾーンの仏教会に駐在していたが、  
キャンプ内の英語伝道の具体的内容と、当時二世に仏教がどのように味わわ  
れていたかを知るために、キャンプ内での英文仏青発行物掲載の11の法話<sup>33</sup>  
と、23の仏青会員記事の検討を試みた。その結果、大別して①倫理性の強調、  
②救いの強調、③御同朋の強調、④愛国心の強調、⑤仏法相統の強調の5つ

の特徴が見出されるように思われる<sup>34</sup>。そこで以下に、各項目ごとの内容を例示し検討を加えてみたいと思う。

### ①倫理性の強調

まず①倫理性の強調とは、米国の真宗門徒の行動に何らかの倫理的規範を求めるもので、その規範の根拠には通仏教の倫理観が用いられたようである。

例えば久間田開教使の法話「内側の質」には、「人の内側の質にはブツダ<sup>35</sup>の指導により、真の智慧と謙虚さが備わるようになる<sup>36</sup>」という言葉が見られ、欧州系得度者ゴールドウォーターが寄稿した法話「仏教としてのアメリカ化」には、「真のアメリカ人は政治的・人道的マナーとして真の仏教徒であり、理解・無我・慈悲の精神に基づき、偏見・怒り・貪欲・憎悪という愚痴から生じる心を持つてはいけない<sup>37</sup>」とある。これらはおそらく日系人に対しての偏見や敵視といった世論が高まりを見せる中で、釈尊の説いた普遍的な倫理観に沿う生活を心がけることで、日系人の尊厳を守ろうとしたのではないかと思われる。また欧州系得度者ウデイルが寄稿した法話「外見は時に偽る」には、当時仏教を「科学の宗教」と称賛し欧米の知識階級に影響を与えていた、哲学者ポール・ケーラスのベストセラー『仏陀の福音』を引用して、「世俗的外観にとらわれず、仏法僧に帰依し日々の任務に取り組めば、ブツダの忠実な信徒となる<sup>38</sup>」と、真の仏教徒としての行為を非常時にも保ち続ける重要性が説かれている。

一方仏青記事にも、開教使の法話よりも顕著に通仏教の倫理的規範がみられるように思われる。これらの記事は狭いキャンブ内で共同生活を送る上でのトラブルを回避し、「アメリカ化」という当時二世が重視していたキーワードを用いつつ、「よきアメリカ市民<sup>39</sup>」としての人格形成のために仏教徒としての倫理観を強調する必要性があったのではないかと考えられる。例えば

「アメリカ化された仏教とその意義」という記事には「国際紛争中の困難な時代だが、さとりを目指しより良いアメリカ人になることを仏教は教えていることを思い出せ<sup>40</sup>」とあり、「憎悪の世界」という記事には「“我々を憎む者を憎まなければ、幸せに生きられる。たとえ我々を憎む者の中で生きる時でも、自己を憎しみから解放せよ”という『法句経』の言葉をキャンプ生活でいかし、道徳的義務の感性を向上させ、よりよい生き方に向かえ<sup>41</sup>」と、当時の英語礼拝聖典に収録されていた『法句経』の言葉を、アメリカ仏教徒の倫理的規範として用いている。

またキャンプ内では日曜学校も盛んにおこなわれており、当時十代から二十代が大多数であった日系二世で構成される仏青会員は日曜学校教師としてその指導にあたっていたが、「日曜学校は若者の人格を形成する」という記事には「日曜学校はよい習慣づけや、人生とその問題に対して知性ある取り組みをさせる人格形成を与える<sup>42</sup>」と、キャンプ内で問題となっていた若者の非行防止に、日曜学校が重要であると述べるものもみられる。

そして「人生」という記事には「日系人が経験した悲劇や苦しみが、人生は快樂でないことを証明し、四諦の教えの重要性を私に証明した<sup>43</sup>」と、戦争の悲劇を四諦の上で味わうものや、「仏教と現代社会：八正道に従う務め」という記事には「“有刺鉄線の背後の市民”でいることにかかわらず、仏青会員としてアメリカの民主主義システムを保存し強化するようなブツダの八正道の実践により、愛国的市民としての生活ができる<sup>44</sup>」と、八正道の実践とアメリカの民主主義を関連させて、よきアメリカ人となるようすすめるものもある。

## ②救いの強調

救いの強調とは、浄土往生や阿弥陀仏の救済の側面を強調するものでもあ

り、真宗伝道の上で中心となる。

特にキャンプ内での二世開教使の法話には、苦難や悲劇に直面していた二世に向けて、仏の慈悲や愛を強調しながら彼らを励ます内容が強くみられることに注目すべきであろう。例えば石浦開教使の法話「キャリア・オン、ブッセイ」には「キャンプ生活でもブッダは我々を見捨てず、悲しい時も常に共にいらっしゃる<sup>45</sup>」とあり、今村開教使の法話「新年は重要である」には「別離や出兵で悲しみと痛みを経験するだろうが、宇宙を明るく照らす太陽のようにブッダの愛は我々を包み込む<sup>46</sup>」と、説いている。また角田開教使の法話「彼岸の意味と意義」には「ブッダは三部経の中で、全ての衆生が阿弥陀仏の慈悲を完全に信じ頼ることで、阿弥陀仏の西方のパラダイスに生まれ、永久の救済が確実になる方法を教える<sup>47</sup>」とあり、同じく角田開教使の「ブッダと Love」には「仏教は仏の本質として Love と Mercy の概念を強調する。『観経』には“仏の心は全てを抱く Mercy と Love だ”とあり、ブッダは Love であり Wisdom である<sup>48</sup>」と説いている。パイリンガルの二世開教使たちが、Love（愛）や Mercy（慈しみ）等のキリスト教用語を借用しながら阿弥陀仏による救済を英語で説き、二世の若者の苦悩に寄り添おうとしていた姿勢が法話の随所にみられる。

また仏青記事をみると、例えば「仏教：ゴールデンゲートブリッジから自由の女神へ」という記事には「慈悲深いロード・ブッダは、弱く能力が非常に低い者のために、念仏の道を残している。それは堅固な信仰と、南無阿弥陀仏と発音するだけの、誰もが歩める最も簡単な道で、仏教の教えのエッセンスなのだ<sup>49</sup>」というものもあり、当時の仏青会員の中には深い真宗理解と信仰を持つものもあり、それらは開教使の熱心な教化の賜物であったことがわかる。さらに戦争が激化し二世部隊が次々に徴兵されていく1944年頃から、仏青発行物の記事全体の内容が、①倫理性より②救いの強調に重点が移る量

的变化がみられるが、例えば「兵士の皆さんへ」という記事には「我々仏教徒は幸いに、死は永遠の別れではなく皆涅槃で再び会い、合掌を通して心は常に共にあることを、ロード・ブッダより学んでいる<sup>50</sup>」と、俱会一処の世界があるよろこびや戦死した仲間を思慕する記事もみられる。

前述のとおり英語教学には通仏教義を寛容に受け入れるという特徴もみられるが、真宗教学の伝道も当然なされていたことがわかり、特に幾人かの仏青リーダーは真宗教学を理解・信仰していたことが記事によってあきらかである。そしてまだキリスト教的用語や表現の借用が目立つが、信心、阿弥陀仏の慈悲、浄土往生、南無阿弥陀仏の念仏等の語は、英文法話・仏青記事の両方において肝要として用いられているものが多く、たとえ通仏教的表現を一部用いていても、真宗教学が当時の英語伝道の中心内容であったと考えられるであろう。

### ③御同朋の強調

御同朋の強調とは、仏法をよりどころとする仏青会員同士の結びつきや友情を強調するものであるが、閉鎖的な空間であったキャンプ生活の中、盛んな活動を通して二世の友情と団結は一層強くなったと思われる。例えば今村開教使の「新年は重要である」という法話には「強制移動後の仏青のみんなが歩んできた道はバラ色ではなく、心のジレンマ、わびしさ、惑いという困難の積み重ねを通し、ともに根気強く歩み続けた<sup>51</sup>」と、二世の団結と努力を褒めたたえている。

また仏青会員の記事を見ると、キャンプ内での仏青大会冊子には、「仏青会長メッセージ」として「我々日系アメリカ人が苦悩の時に集まり、人生について議論すべき機会だ<sup>52</sup>」とあり、また「ユニットIIメッセージ」として「同じ信仰を持つ友人を作り、宗教的インスピレーションを受け、仏教徒と



して自信をえる機会だ<sup>53</sup>」と述べられており、仏青大会を同じ信仰を持つ友達づくりの場と意義づけている。そして出兵や再移住による別離の悲しみに際しては、東部移住や戦地にいる友人に向け「夢を持ち続けて」という記事で「平和な時代に再会できるまで共に仏教会で過ごした時間を大事にして、南アリゾナの砂漠に根付いた美しい友情を心にいつも抱いてほしい<sup>54</sup>」と述べるものや、ある編集後記には「あなたが今孤独で辛くあっても決して一人ではないと伝えたい。強制収容や戦争は、誠実な友情の重要性をこれまで以上に気づかせた<sup>55</sup>」と述べてある。また「宗教が必要とされている時」という記事では、東部移住の仲間からの手紙も紹介し、「新しく始まったシカゴでの毎週の礼拝は、日常生活にインスピレーションをもたらし、移転でホームシックになっている大勢の者に、ブツダの光が温もりを与えている<sup>56</sup>」と、仏法・友情の両方が新天地では重要だと述べている。

仏教徒であるということは日本との繋がりが強い証拠であるとキャンプ内でネガティブにとらえられ、二世が身の安全を図りキリスト教へ改宗していく中、アメリカ社会でマイノリティだった仏教はすぐに廃れるであろうという見方もあったようであるが<sup>57</sup>、逆にそういった流言やキリスト教優位のキャンプ内の状況が仏青会員たちを一層奮い立たせ、組織を強固にし拡大させることになった。そしてその仏青会員の連帯が戦後も継続し、現在まで教団が存続するエネルギーとなっていったことは特筆すべきことであると思われる。

#### ④愛国心の強調

愛国心の強調とは、アメリカへの忠誠を強調するものであるが、ここには戦時中という特殊な状況が強く反映されている。1943年 WRA はキャンプ内の日系人に忠誠審査をおこなったが、特に二世にはアメリカ軍として戦地に

おもむく意思があるか否かを問い、「忠誠」「不忠誠」と分けて処遇を決めた<sup>58</sup>。アメリカ市民である二世の多くは忠誠と答えたが、入隊志願者は強制収容されていた自らの境遇に矛盾を感じたため少数であった。しかし、その後兵士不足から大量に徴兵され二世入隊対象者3万6千人中、3万3千人が入隊せしめられた。ハワイ州出身の者も含めた日系アメリカ人部隊は、人間の盾として欧州戦の最前線に投入され、「Go for broke! (当たって砕けろ)」を掛け声に、収容所の家族や仲間がアメリカ人として認められるために死を覚悟して戦った。日系部隊の死傷率は他の部隊の約3倍にあたり、アメリカ合衆国史上もっとも多くの勲章を受けたが<sup>59</sup>、二世部隊の多くが仏教徒であったといわれており<sup>60</sup>、彼らは時として地獄のような戦地で日曜学校で歌った讃仏歌を口ずさみ開教使の法話を思い出しながら絶望と死の恐怖に耐え忍び<sup>61</sup>、懐中本尊<sup>62</sup>を胸に欧州の地で次々に若い命を散らしていった。

角田開教使の法話「賛辞：シラミズ軍曹葬儀にあたり」では、「何千もの仲間が現在戦闘中、彼らの家族と共にいよう。シラミズ軍曹は、言論・思想・出版・宗教の自由と、民族・人種・肌の色・信条にかかわらず、すべての人が平等な機会を与えられるアメリカの民主主義の理想のために息絶えた<sup>63</sup>」と、遺族の悲しみを慰めている。また健全なるアメリカ市民の育成を担うという機能の上で許可されていたキャンプ仏教会の活動は、常にWRAの監視下であり、アメリカへの忠誠というものを説かねばならない特殊な状況であったことがこの法話からもうかがわれる。

また仏青記事には愛国心に関する記事が法話より多くみられるが、例えば「アメリカ化された仏教とその重要性」には「国際紛争中だが、我々はさとりを目指しており、仏教はよいアメリカ人になることを教え、よいアメリカ人としての行為や行動によって、我々の宗教やアメリカ市民の権利に関する疑いを排除できる<sup>64</sup>」と記されている。仏青発行物の表紙も、二世徴兵後は

兵士や国旗がイラストで描かれるものみられ、仏青全体で徴兵された友人を支えるべく士気を高めようとしていたのではないかと思われる。

なお日本人開教使の約半数が忠誠審査で「不忠誠」とされ、トゥール・レイク隔離センター<sup>65</sup>や司法省管轄の抑留所で戦時中を過ごしており、当時の開教使は個々で様々な意見を持っていたということも追記しておく。

### ⑤ 仏法相続の強調

仏法相続の強調とは、アメリカ仏教を引き継ぐ二世の責務を強調するものである。③御同朋の強調でも触れたが、キャンプ内で仏教に対するネガティブな流言があった中、強制収容初期には「キャリー・オン、ブッセイ！（引き継ごう、仏青）」というスローガンのもと仏青大会も盛んにおこなわれ、敵国である日本の仏教でなく、アメリカ市民のためのアメリカ仏教を構築し主導せねば消滅してしまうという危機感と責任感が、法話・仏青記事にみられる。

例えば石浦開教使の「キャリー・オン、ブッセイ」という法話には「キャリー・オン、ブッセイ！ たった3語だが、この背後には無知の荒野を颯爽と歩む何千もの仏の兵士が、疲れた夜の闇を明るくするために仏の教えを広げ、愛の光の中で行進する。キャリー・オン、ブッセイ！ キャリー・オン！<sup>66</sup>」と、兵士になぞらえ二世の仏法継承の責務を力強く述べている。

また「我々は、仏青」という仏青記事には、「仏青会員のあなたの肩に、この国の仏教の未来がかかり、仏教の炎を燃やし続ける責任がある<sup>67</sup>」と記され、「仏教：ゴールデンゲートブリッジから自由の女神へ」という記事には「どこへ移住しても合掌し、南無阿弥陀仏と高らかな念仏の声を絶やさないように！<sup>68</sup>」と、仏教東漸の願いが記されている。

この一世から二世への仏法相続は、真宗伝道の言語・文化・国家の超越と

鉄条網のなかの浄土真宗

いう課題を含んでおり、当時の法話・仏青記事の背景にあった中心テーマであったと言えるだろう。

以上5つの特徴を考察したが、二世開教使たちの法話からは、多くの若者を仏教に導くために「普遍なる宗教」としてのアメリカ仏教の強調が必要であると考え、通仏教的な文言を用いて仏教を広くとらえながら、キリスト教の用語を借用して阿弥陀仏の救済や浄土往生の道へと導く伝道上の創意工夫がおこなわれていたことがうかがわれ、また一方二世の仏青会員の記事からは、キャンプ内でアメリカ仏教徒としての活動の継続が一層主要なテーマとなり、よきアメリカ市民になるために倫理面を強調し懸命に努力をしたことが記事よりうかがわれるのである。そこで次に5つの特徴の中でも、①倫理性と④愛国心の強調という概念は、強制収容前より形成され始めていたのであるが、これらの形成過程について考察してみることにする。

#### 4、倫理性・愛国心という真宗のアメリカ化の背景 ～ゴールドウォーターと久間田～

教団ではキャンプ収容前より、アメリカ国内での教団存続のための真宗のアメリカ化という課題が浮上しており、その議論の中心にはジュリアス・ゴールドウォーター<sup>69</sup>と久間田顕了<sup>70</sup>という二人の僧侶の影響が考えられる。

ゴールドウォーターは、裕福なドイツ・ユダヤ系アメリカ人の子息として生まれ、ハワイに在住した時にハワイ教団で英語伝道を担っていた欧州系得度者のアーネスト・ハントより強く影響を受け仏教徒となった。そしてゴールドウォーターはアメリカ本土へ帰り、北米教団で得度を受けた後、ロサンゼルス別院で二世の子弟を対象とした英語伝道に携わりながら<sup>71</sup>、ハントが

おこなっていた非日系人対象の超宗派仏教団体を手本に、「The Buddhist Brotherhood of America」をロサンゼルスで結成した<sup>72</sup>。当時の日曜学校の生徒たちは、ハントが制作した英語礼拝聖典『Vade Mecum<sup>73</sup>』にある拝読文や讃仏歌を通して倫理的通仏教義に親しみ、そこに開教使が説く救主・阿弥陀仏を重ねあわせたような形で、二世の教学理解は定着していたようである。戦時中ゴールドウォーターは、『Vade Mecum』を引用した礼拝聖典『Buddhist Gathas And Ceremonies<sup>74</sup>』を1943年にロサンゼルスで出版し各キャンプに配布したが、この通仏教義を説く聖典はキャンプ仏教会の英語礼拝で使用され、『Vade Mecum』とともに戦後の聖典にも依用され続けて、通仏教義が真宗の英語教学に取り込まれた一つの要因になったと考えられる。

またゴールドウォーターは真珠湾攻撃の翌月である1942年1月4日、教団本部（サンフランシスコ）にて開催されたカリフォルニア仏青連盟緊急会議に召集され<sup>75</sup>、本部の久間田や二世の仏青代表者たちとともに真宗のアメリカ化に関して議論した。その結果、アメリカ化のアクションとしての「仏教活動」の推進として、「宗教」と「福祉」があげられ、特に「宗教」は具体的に、「A. 宗派仏教より通仏教の強調」、「B. 全ての儀礼をアメリカ的用語にする」、「C. 全ての会を英語で執行する」、「D. 日校教師の再教育（英語の使用、通仏教教育、能力・年齢に応じた教育メソッドの統一等）」、「E. 開教使の英語習得を提案し仏青が援助する」とし、英語の必要性はもちろんのこと、通仏教の強調がなされている。この会議でも、超宗派化と通仏教義を強調していたゴールドウォーターの影響が少なからず及んだことが想像できるであろう。

また、ゴールドウォーターは戦時中ロサンゼルス地区の仏教会に保管されていた日系メンバーの荷物管理とキャンプへの配達も任されており、同時に

鉄条網のなかの浄土真宗

キャンプ巡りの布教もおこなうことで、二世のアメリカ化思想にも影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

また一方二世開教使の久間田はシアトルに生まれ、教団の未来を担う二世留学生として来日し、龍谷大学修士課程を修め得度・教師を授かった後に、アメリカに戻り教団本部で仏青主事として二世を指導していたが、開戦から強制収容までの間、アメリカ政府との交渉<sup>76</sup>や教団内の二世に向けての英文通達等、英語での交渉の全てを担っている<sup>77</sup>。久間田は仏教会宛通達で、「仏教の強い信仰を保ちつつ、アメリカ市民・居住者としてアメリカへの不動なる忠誠心を持って防衛せよ<sup>78</sup>」、「仏教徒はこの非常時に、日常生活のなかで強く穏やかにそして冷静な信仰を持ち、米国の国防における政府当局との協力を断固とせよ、またアメリカ合衆国の国旗に敬意を示せ<sup>79</sup>」、「仏への真の信仰をもって沈黙の中、我々の祖国アメリカに奉仕せよ！<sup>80</sup>」等と、懸命に愛国心を呼びかけており、また仏青会員宛通達では、「戦争により物質と金銭的な文明が価値を失った今こそ仏教に目を向けるときであり、各収容所で仏教会設立に個々が努力し、アメリカ仏教の基礎を構築しよう<sup>81</sup>」と、堅固な信仰と愛国心を高揚し、仏教徒としてよきアメリカ市民であるべきだと通達で繰り返し述べている。

つまり強制収容前の段階で超宗派の理念や通仏教義、愛国心がすでに説かれており、特にゴールドウォーターや久間田の影響が、前項で示したキャンプ内仏青発行物にあらわれているのではないかとと思われるのである。

## 5、おわりに

太平洋戦争、そして強制収容という出来事は、日系人に大きな転換をもた

らした。それは日本人移民はアメリカ市民になるべきであり、日本をルーツにした浄土真宗をアメリカ仏教にするべきだという意識への転換だった。それらの意識の転換が、本稿の提示した仏青発行物の法話と記事によっても具体的にあらわれていたと言えよう。そして強制収容は、教団をアメリカの宗教団体組織へと転換させた。1944年4月29日各キャンプより代表者がトパーズに参集し教団会議がおこなわれ、「Buddhist Churches of America (BCA)」の設立が正式に決議され、新役員はアメリカ市民である若き二世で構成されることになり<sup>82</sup>、世代交代によって教団のアメリカ化が進められることとなった<sup>83</sup>。結果的にゴールドウォーター等<sup>84</sup>が提示した超宗派（脱浄土真宗）という概念は、松陰総長等と対立し採用されることはなかったが<sup>85</sup>、英語教学の通仏教との併存は仏青発行物にもみられるように、アメリカ化の名のもとで採用されることとなった。

また日系人が経験した強制収容という悲劇は、仏教東漸という新たな発展のきっかけともなった。1943年後半頃よりアメリカに忠誠を示した日系人はキャンプから解放されるようになったが、まだ西海岸の地が帰還禁止であったため、一部の二世はシカゴ等<sup>86</sup>のアメリカ東部に移動し、そこに仏青や仏教会が新たに創設された。そして終戦前の1945年1月31日、西海岸は再移住可能となり、日系人は懐かしい土地に戻った。二世兵士の活躍と犠牲が、戦後の日系アメリカ人の地位の上昇に大きな役割を果たしたことは間違いないが、帰還後も日系人への差別が根強く残っていたため、腕や脚を失った帰還兵がアメリカに戻りレストランに入っても注文さえ聞きに来ない等のあからさまな人種差別を受け、戦場で亡くなった仲間を思い出し絶望的な苦しみを味わったことという残酷な現実も伝えられている。その中で心のよりどころとなったのは、再建されていく仏教会とそこに集まる日系人コミュニティであった。そして住む家・職を失った日系人のために、多くの仏教会は臨時ホ

ステルの形態を取り、住まいや食事を提供し、開教使は清掃業などで生計を立て仏教会再開へ身を尽くしたのだった。そして彼らの汗や涙の一粒一粒が、アメリカ浄土真宗の足跡であり、その足跡が今に至るアメリカ化という道筋をつくってきたということ、忘れてはならないであろう。

## 註

- 1 他に「北米開教区」「北米仏教団」という名称も使用されている。
- 2 1944年に改称。詳細は本稿末で述べる。
- 3 明治維新期の日本国内の仏教界にも、同様に超宗派の動きがあった。(大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編(2016)『近代仏教スタディーズ』法蔵館 p.23.)
- 4 拙論(2013)「浄土真宗のアメリカ化に関する一考察：北米開教区における「浄土」理解より」『龍谷教学』48, pp.1-13.
- 5 戦前の教団に関する代表的な先行研究として以下が挙げられる。守屋友江(2001)『アメリカ仏教の誕生：二〇世紀初頭における日系宗教の文化変容(阪南大学叢書)』現代史料出版, Ama, Michihiro (2011), *Immigrants to the Pure Land: The Modernization Acculturation and Globalization of Shin Buddhism 1898-1941*, Univ. of Hawaii Press,
- 6 戦時中の教団に関しては以下が先行研究として挙げられる。Kashima, Tet-sudan (1977), *Buddhism in America: the social organization of an ethnic religious institution*, Greenwood Press, Tuck, Donald R. (1988), *Buddhist Churches of America: Jodo Shinshu*, E. Mellen Press.
- 7 本稿では1922年から1952年の日本人帰化権否認により法的に市民権を持てなかった日本人・日系一世も含め、アメリカ在住で日本人の血統の者を日系人と総称する。
- 8 アメリカ政府はRelocation Center(転住センター)という非人道的行為を和らげるための歪曲の表現を公式には用いた。しかし現実には、「Concentration Camp(強制収容所)」であり、現在全米日系人博物館ではこの名称を公式に用い、本稿でもこちらを使用する。
- 9 英語を話せる開教使がいない収容所内仏教会では、All Young Buddhist Association of Japan (1934)『The Teachings of the Buddha』、Paul Carus (1894)『Gospel of Buddha』、Dwight Goddard (1932)『Buddhist Bible』等



- が拝読された。(BCA (1974), *Buddhist Churches of America*, p. 64.)
- 10 Kashima, p. 53.
- 11 本稿の参考資料は以下のものを中心とする。
- ①戦時中の教団に関する資料：全米日系人博物館内 BCA アーカイブ所蔵資料（開教使の書簡、教団本部でおこなわれた緊急会議の英文議事録と英文通達、キャンプ仏教会発行者、キャンプ内での仏青発行者）
- ②戦時中の教団に関する資料：出版物（BCA (1974), *Buddhist Churches of America, Volume 1, 75 year History 1899-1974*, Nobart, BCA (1998), *Buddhist Churches of America: a legacy of the first 100 Years*, BCA, Masuyama, Eiko Irene (2004), *Memories: the Buddhist Church experience in the camps, 1942-1945*, 2nd ed., BCA Research and Propagation Committee）
- ③強制収容された開教使（夫人）の日記や回顧録（田名大正 (1976) 『サンタフェー・ローズバーグ戦時敵国人抑留所日記』 山喜房仏書林, 木原静胤 (1985) 『嵐の中で：開戦とスパイ容疑』 永田文昌堂, Fujimura, Bunyu (1985), *Though I be crushed: the wartime experiences of a Buddhist minister*, Nembutsu Press, Imamura, Jane Michiko (1998), *Kaikyo*, Buddhist Study Center Press)
- 12 『Bussei Review』 (ポストン、1944.2-4)、『Bussei Digest』 (ヒラ・リバー、1945.1-7)、『Bussei Light』 (ツールレイク、1943.5)、『Bussei Life』 (トパーズ、1943.6-8)、『Unity through Gassho, First semi-annual YBA conference』 (ヒラ・リバー、1943.6)、『All Units Forum - Gassho』 (ポストン、1943.9)、『Manzanar Bussei Guide』 (マンザナアー、1943冬)等 (全て BCA アーカイブ所蔵)
- 13 多くの本願寺派開教使が逮捕された背景には、当時の大谷光照門主が天皇といとこの関係にあったことと、ほとんどの仏教会が日本語学校も併設しそこで日本への愛国心を教えていると疑いがかけられていた。(BCA (1974), p. 61., 木原, pp. 50-56.)
- 14 強制収容所が出来るまでの数か月間、米国陸軍によって管理された集合センター (Assembly Center) に日系人は拘留された (1942年3月～10月)。センターは野外催事場や競馬場の馬小屋などを急ごしらえで転用したもので、その施設は人間が住むようなものではなかった。(全米日系人博物館 WEB <[http://www.janm.org/jpn/nrc\\_jp/internfs\\_jp.html](http://www.janm.org/jpn/nrc_jp/internfs_jp.html)> (閲覧日2016.9.1))
- 15 タコマ仏教会はプラット、ロサンゼルス別院・洗心仏教会・ガーデナ仏教会はゴールドウォーター、サンフランシスコ仏教会はウデイルという3名の欧州

- 系得度者が建物を管理していた。(BCA (1998), pp. 181-374.)
- 16 各仏教会の戦時中の状態を参照。(BCA (1998), pp. 181-374.)
  - 17 WRA 発行のキャンプのハンドブックの宗教の項目には、他のアメリカ市民と同等に宗教を信仰する自由が保障され、宗教者は礼拝や宗教伝道を許可されていた。(WRA (1943), *The Relocation Program: A Guidebook for the Residents of Relocation Centers*, U.S. Department of the Interior, p.12.)
  - 18 1940年に約56000人の仏教徒がアメリカに存在し、内日系は55000人だった。1936年の宗教調査 (Census) では、14388人の成人メンバーが浄土真宗に登録されており、信者の実数は3倍の43164名ほどと推測できる。これは当時の日系アメリカ人仏教徒の4分の3を占める割合になる。(WRA Community Analysis Section (1944), “BUDDHISM IN THE UNITED STATE, Community Analysis Report No. 9”, U. S. Department of the Interior.)
  - 19 真宗大谷派、浄土宗、真言宗 (通称：高野山)、曹洞宗、臨済宗、日蓮宗も当時アメリカ内で伝道しており、収容所にも僧侶が収容されていた。本願寺派と合同で活動していた場合もあったが、結局解散し宗派ごとに活動したところもある。中にはキャンプ内でアメリカ化された超宗派大乘仏教をうたい、新しく結成された仏教団体もあったが、大きなムーブメントには至らず、結果本願寺派が最大勢力のままであった。(Kashima, p. 54.)
  - 20 1942年の WRA による被収容者11万1170名 (一世38520名、二世76650名) を対象とした宗教調査によれば、仏教徒55.5%-61719名 (一世68.5%-26392名・二世48.7%-35327名)、プロテスタント信者28.9%-32131名 (一世21.9%-8419名、二世32.6%-23712名)、カトリック信者2%-2199名 (一世1.2%-464名、二世2.4%-1735名)、天理教等神道0.4%-422名 (一世0.7%-278名、二世0.2%-164名)、生長の家0.05%以下-37名 (一世0.1%-33名、二世0.05%以下-4名)、無回答13.2%-14942名 (一世7.6%-2934名、二世16.1%-11708名) であった。(WRA (1942), “Religious Preference by Nativity, under 14 years old and older: Evacuees to WRA in 1942”, *The Evacuated People - A Quantitative Description*, U.S. Department of the Interior, Table 24, p.79.)
  - 21 ★印のキャンプ仏教会の日本語名称は資料未確認のため不明。
  - 22 コロラド州デンバーとラプトン、ユタ州ソルトレイクとオグデン、ニューヨーク州ニューヨークの仏教会 (ネバダ州メサはサンガのみ) はフリーゾーンと呼ばれる内陸部・東部であったため、基本的に開教使やメンバーの強制収容もなく継続して活動していた。(BCA (1998), pp. 181-374., Masuyama, p. 141.)
  - 23 これらは司法省管轄の収容所で、戦時転住局によって一世のトラブル・メー

- カーとみなされた者が、強制収容所からサンタ・フェ、ビスマルク、クリスタル・シティ等の抑留所に転送された。なお抑留所内でも伝道活動がなされた記録もある。(田名、木原)
- 24 開教使は戦時中抑留所やキャンプ間の移動があったが、1945年1月付英語開教使名簿 (BCA アーカイブ所蔵) 等を参照。(BCA (1998), pp.65-121., Masuyama, pp.189-190.) またキャンプ日本語名称は全米日系人博物館 WEB 参照。最大収容人数・収容期間は、WRA (1942), *The Evacuated People*, Table 5, p.17参照。
- 25 BCA (1998)の開教使別経歴を参考にした。なおミニドカ収容所で、1944年11月22日寺川湛濟開教使が死亡している。
- 26 開教使の中で逮捕の第一号は、1942年2月10日北カリフォルニア・サリナス仏教会駐在藤村等でスパイ容疑であった。(木原、p.54.)
- 27 玉井、板原、寺川 (一旦逮捕・拘留) の3名。
- 28 松陰了諦(1890-1948)：龍谷大学教授を経て、増山頭珠元北米教団総長推薦のもと、1938年から教団総長として10年間活躍した。日系人の強制収容と就任期間が重なり手術や入院も繰り返したが、教団の存続と戦後の再興に身を尽くしアメリカで往生した。(米国仏教団開教本部『教壇第二輯 松陰総長追悼号』米国仏教団、1969.6.21)
- 29 北米仏教団本部発1942年4月20日達示第17号には各仏教会宛に、「キャンプ教会に関する規定」として、「キャンプ教会ハソノ所在地ヲ冠シ〇〇仏教会ト称呼ス」「キャンプ教会ニハ開教使若干名駐在シ積極的精神運動ニ従事スルモノトス」「キャンプ教会ニ駐在スル開教使ハキャンプ所在地決定ノ上戦時転住局ノ指令ニヨリ派遣スルモノトス」等を定め記している。
- 30 WRA 発行のキャンプのハンドブックのレクリエーションの項目では、「赤十字、YMCA・YWCA とボーイスカウトは強く推奨する」と WRA がキリスト教徒の活動を推奨していることが記されている。実際欧州系牧師が頻りにキャンプで講演をし、二世の中には敵国文化をルーツとした仏教を信仰するより、キリスト教徒になる方がキャンプ内、その後の生活がより優遇されると考え改宗するものも少なくなかった。(WRA (1943), *The Relocation Program: A Guidebook*, p.12., Kashima, p.54.)
- 31 永富信常、長藤行精、河野行道、白川沢雄、大野静哲、毛利令知、寺尾英雄、西永義貫、藤村文雄、内藤照善開教使らの書簡。(BCA アーカイブ所蔵)
- 32 例えば藤村文雄開教使 (1942.4.9付、ビスマルク抑留所より) や、西永義貫開教使 (1942.4.10付、ローズバーク抑留所より) からの松陰総長宛書簡。

- 33 4名の二世開教使の法話を中心に、ロサンゼルスゴールドウォーターとサンフランシスコのウデイルという2名の欧州系得度者が送付した法話を加えたものを研究対象とした。
- 34 戦前より二世による仏教は仏教のアメリカ化を中心課題としており、①倫理性、③御同朋、⑤仏法相続の重視は仏教発行物にすでにみられているが、強制収容により一層の強調がみられる。(例：北米仏教青年会連盟・北米仏教女子青年会連盟(1934)『兄弟』第2巻第2号)
- 35 法話・仏教記事にみられる「ブツダ」「ロード・ブツダ」という語が、釈尊と阿彌陀仏のどちらを指すのか、その都度文脈で考慮せねばならない。
- 36 以下の仏教発行物引用末の注には、該当箇所の原文翻訳を挙げる。  
「教育や洗練、全ての表面的なものは、本物として通ることもあるが、ブツダの精神的な指導に信仰を持つものに授けられる質としての、真の智慧と謙虚さというものと比較することはできない。」(Rev. K. Kumata, "Inner Quality," *Bussei Life*, Vol.1- No.3, Topaz, June 6, 1943)
- 37 「政治上の、そして人道的マナーの上で、本当のアメリカ人は本当の仏教徒である。我々の宗教には従順・命令・我慢などの言葉はなく、理解・無我・慈悲という言葉で代わりを考えよう。偏見・怒り・貪欲・憎悪は、我々の無知の程度を示すものである。」(Rev. Julius A. Goldwater, "Americanism As Buddhism," *Manzanar Bussei Guide*, 1943)
- 38 「仏法僧に帰依する心を常に保ち、... 知識による日々の義務に取り組むべきだ。... そのように生きることによって、ブツダの忠実な信徒になる。」(Rev. B Udale, "Appearances are sometimes deceitful," *Bussei Review*, Vol.2- No. 10, Poston 3 YBA, Feb 8, 1944)
- 39 ④愛国心の強調とも内容が重複しうる
- 40 「国際紛争の時代に日常生活を送る我々は、さとりを目指していることを思い出そう。仏教は、我々はより良いアメリカ人になることを教える。より良いアメリカ人として、我々の行為や行動によって、我々は忠実なアメリカ市民としての権利と同様に、我々の宗教に対するすべての疑いを排除することができる。」(Editor, "Americanized Buddhism and its significance," *Bussei Light*, Vol.1-No.1, Tule Lake YBA, May 2, 1943)
- 41 「『法句経』に、“我々を憎む者を憎まなければ、幸せに生きることが出来る。たとえ我々を憎む者の中で生きる時でも、自己を憎しみから解放せよ”とある。... それは収容所でますます不可欠になる。... 我々は道徳的義務の感性を向上させ、人生のより良い方法に向かう旅を始める。」(Manabu Fukuda, "The

- world of hatred," *Bussei Review*, Vol.13-No.3, Poston 3 YBA, Mar 21, 1944)
- 42 「日曜学校は学校のように若者に良い習慣づけや人生とその問題に対する知性ある取り組みをさせる人格形成を与える。日曜学校が人生の道徳的な局面で若年層を助けられことは注目に値し、我々はそれに感謝すべきだ。」 (Editor, "Sunday school molds character of youth," *Bussei Digest*, Vol.2-No.1, Rivers, Jan 8, 1945)
- 43 「時々現在の戦争におけるすべての悲劇が、なぜ人間の人生の上でそれほど無慈悲にそして一斉にやって来なければならないか理解できない。この悲劇と受難は、人生がピクニックや喜びの壮大な旅行ではないことと、四諦の重要性を私に証明した。」 (Manabu Fukuda, "Life," *Bussei Review*, Vol.3- No.4, Poston 3 YBA, Apr 5, 1944)
- 44 「我々が、“有刺鉄線の背後の市民” でいることにかかわらず、仏青会員としてブツダの八正道、つまり正しい見方、正しい願い、正しいスピーチ、正しい動作、正しい暮らし、正しい努力、正しいマインドフルネス、および正しい禅定の実践により、愛国的市民としての生活を送ることができる。」 (June Nakayama, "Bussei and the present world - Tasks to follow eightfold path," *Bussei Life*, Vol.1-No.4, Topaz, June 20, 1943)
- 45 「我々の人生が、“スーツケースを抱えた旅行” と“大量生産” の暮らしとなつて一年以上が経ったが、 どこにいてもどんな辛い人生でも、家庭の仏壇に毎日慈悲なる方を拝むことを怠ったとしても、ブツダは我々を見捨てない。ブツダは我々の悲しい時、幸福な時、生活のいかなる時にも共にいらっしやる。」 (Rev. Newton Ishiura, "Carry on, Bussei," *Unity through Gassho: First semi-annual YBA conference*, Gila River, June 20, 1943)
- 46 「我々の今後の日々は予想できない。嬉しい再移住には別れの涙が伴う。あなた方の多くはアメリカ軍に入り栄光とともに悲しみと痛みを経験する。しかし雨でも雪でも風が吹こうとも、宇宙を明るく照らす太陽のように、ブツダの愛は我々を包み込む。そして喜びや悲しみ、幸せや苦痛を感じても、我々一人ではないという自覚が乗り越えさせてくれる。」 (Rev. K. Imamura, "New year is significant," *Bussei Digest*, Vol.2-No.1, Rivers, Jan 8, 1945)
- 47 「ブツダは三部経の中で、この世の全ての衆生が、阿弥陀仏の慈悲を完全に信じ頼ることを通し、阿弥陀仏の西方のパラダイスに生れることによって、永久の救済が確実になるという涅槃のむこう岸にたどり着く方法を教える。」 (Rev. Tsunoda, "The meaning and significance of Higan," *Bussei Review*, Vol.3- No.3, Poston3 YBA, Mar 21, 1944)

- 48 「英語のどの単語でも、Love の様に多義を持つものはない。Love の純粹で高貴な面をあらわす中国語は“慈悲”という言葉であり、英訳は Mercy や Compassion となる。仏教は仏の本質として、Love と Mercy の概念を大いに強調する。『観経』には“仏の心は真に全てを抱く Mercy と Love である”とある。…ブツダは Love であり、Wisdom である。」(Rev. Noboru Tsunoda, “Buddha & Love,” *Bussei Review*, Vol.2-No.10, Poston3 YBA, Feb 8, 1944)
- 49 「我々の慈悲深いロード・ブツダは、とても弱く能力が非常に低い者のための道を残している。それは念仏の道だ。しっかりとした信仰と、南無阿弥陀仏というアミターバ・ブツダの名を発音することにより、誰もが歩める最も簡単な道で、大変シンプルな仏教の教えのエッセンスなのだ。」(Editor, “Buddhism the golden gate to Liberty,” *Bussei Digest*, Vol.2-No.3, Rivers, Jul 1, 1945)
- 50 「我々仏教徒は幸いに、死は永遠の別れではなく、皆涅槃で再び会い、合掌を通して我々の心は常に共にあることを、ロード・ブツダより教えられている。戦死した友はもはや元の姿で戻って来ないが、毎晩消灯前に合掌する時、笑顔で“やあみんな、戻ってきたよ”と、我々と共にあるだろう。ブツダの永遠の限りない愛を通して、彼も我々の心に戻るのだ。」(Editor, “Soldiers for all: a return,” *Bussei Digest*, Vol.2-No.3, Rivers, Jul 1, 1945)
- 51 「集合所での日々から振り返れば、仏青が歩んできた道はバラのベッドではなかった。心のジレンマ、わびしさ、惑いという障害や困難の積み重ねを通し、仏青のみんなはともに根気強く歩み続けた。今日、私はあなたたちが意気揚々と行進するのを見て誇らしい。」(Rev. K. Imamura, “New year is significant,” *Bussei Digest*, Vol.2-No.1, Rivers, Jan 8, 1945)
- 52 「苦悩の時は、しばしば人と会い人生の問題について議論するのが最も望ましい。特に我々日系アメリカ人がフラストレーションの強いこの時に集まって話をすることは適切だ。」(Manabu Fukuda, “National YBA President Message,” *All units forum: Gassho*, YBA Poston, unit1, Sep 4, 1943)
- 53 「仏青会議に出席する人は、少なくとも二つのことをおこなう必要がある。一つは新しい友達を作ることで、もう一つは宗教的なインスピレーションを受け仏教徒としての自信をえることだ。」(Fred Nitta, “Unit II Message,” *All units forum: Gassho*, YBA Poston, unit1, Sep 4, 1943)
- 54 「いつかこの世で平和の灯りが再び見れたら、我々の道はまた交わる。それまで、我々が共に仏教会で過ごした時間を大事にして、この南アリゾナの砂漠の太陽の下に根付いた、たくさん美しい友情の喜びと恵みを心にいつも抱いて欲しい。ロード・ブツダがいつもあなたとともにおり、南無阿弥陀仏の恵み

- の中で生きていきますように。」(Manabu Fukuda, “Keep your dream alive,” *Bussei Review*, Vol.3-No2, Poston 3 YBA, Mar 7, 1944)
- 55 「この出版物は、当ヒラ・リバーセンターで始まった友情をまとめ、仏青会員のみなさんがどこにいても我々はあなたのことを考えており、硬直してもがくあなたが決して一人ではないと伝えたい。強制収容や戦争は、誠実な友情の重要性をこれまで以上に気づかせた。たとえ世界中に散らばっても、我々は常に思いの中で一体となり、かつて共に暮らした日々を再生できる。」(Editor, “In Closing,” *Bussei Digest*, Vol.2-No.1, Rivers, Jan 8, 1945)
- 56 「我々は、シカゴの中西部仏教会の正会員になった。毎週の礼拝は、私たちの日常生活にインスピレーションをもたらす。我々の組織は成長し、移転でホームシックになっている大勢の者に、ブッダの光が温もりを与えているとお伝えできて大変うれしい。」(Editor, “Religion in the time of need,” *Bussei Digest*, Vol.2-No.1, Rivers, Jan 8, 1945)
- 57 Rev. Noboru S. Tsunoda, “Message Unit3,” *All units forum: Gassho*, YBA Poston, unit1, Sep 4, 1943.
- 58 1943年2月から WRA は陸軍省と協議し共同で忠誠審査をおこなったが、第27・28の質問(「アメリカへの忠誠」と「日本への不忠誠」の質問)が日系収容者の憤慨をかい、キャンプ内で紛争も起きた。結果17歳以上の登録対象者の内87%の68018人が忠誠を示し、拒否したものは1万人近くになった。(大谷康夫(1997)『アメリカ在住日系人強制収容の悲劇』明石書店 pp.50-56.)
- 59 日系部隊は死傷者数延べ9486名(うち戦死860名、行方不明67名)を出した。また欧州への戦闘以外に、アメリカ軍の日本語通訳もいた。(柳田由紀子(2012)『二世兵士激戦の記録』新潮社 p.164.)
- 60 Manabu Fukuda (1944), “Timely topics”, *Bussei Review*, Feb 22, 1944, Vol3 No1, Poston 3 YBA.
- 61 トパーズキャンプにいた京極逸蔵開教使のもとに、戦場にいる二世の元日曜学校生徒から届いた1通の手紙には、地獄の様な状況に身をおいてはいるが、日曜学校で京極から教わった念仏のみ教えや讃仏歌によって人生が有り難く思えるのだと、心からの感謝の言葉が述べられており、5ドル札が布施として同封されていた。京極はその手紙に大きく心を動かされ、戦場や収容所にいる日系一世や二世の心を励ますべく、1944年から「直心」(日本語)と「Triratna (三宝)」(英語)の二つの出版物の布施をする決意をした。(京極逸蔵(1948)『直心』1948.2.4号, pp.17-18., Ama, p.121.)
- 62 米国仏教団開教使本部通信第2号(1944年6月15日、全米開教使信徒御

中)には、「一、法物部ニ関スル件」として、「既報ノ通り、目下御本尊(小形御絵像)ヲ謹製中ニテ一幅二付御冥加金五十仙也 御希望ノ数ヲ御申込下サレタシ。」とあり、本部通信第3号(1944年7月25日、全米開教使・信徒御中)には、「一、軍人へ御本尊ヲ贈ル件」として「出征、入営兵士ニ対シ懐中御本尊ヲ御贈下サイ、本部ニテ目下謹製中ノ御影像ヲ御利用下サイ」とある。

(BCAアーカイブ所蔵)

- 63 「我々の何千人もの少年(息子、夫、兄弟、および友人)が現在戦闘中で、戦争は我々に近づいているが、彼らが正しいと信じ戦うためにアメリカ合衆国、欧州、アジアの各地に愛する方を見送った他の家族の方々と共に集まろう。シラミズ軍曹は、アメリカが掲げる原則と理想のために戦い息絶えた。それは、言論・思想・出版の自由と宗教の自由、民族、人種、肌の色や信条にかかわらず、すべての人が民主主義の試練と報酬の中で共有することで平等な機会を与えられる理想なのだ。」(Rev. N. Tsunoda, "Tribute: Delivered at funeral of Sgt. Shiramizu, Camp II, Feb. 19," *Bussei Review*, Vol.3-No.2, Poston 3 YBA, Mar 7, 1944)
- 64 「国際紛争の時代に日常生活を送る我々が、さとりを目指していることを思い出そう。仏教はよいアメリカ人になることを教えている。よいアメリカ人としての行為や行動によって、我々は忠実なアメリカ市民としての権利と、我々の宗教に対するすべての疑いを排除することができる。」(Editor, "Americanized Buddhism and its significance," *Bussei Light*, Vol.1-No1, Tule Lake YBA, May 2, 1943)
- 65 トールレイク強制収容所は、1943年9月迄に忠誠登録で不忠誠であった者の隔離センターとなった。
- 66 「キャリア・オン、ブッセイ! たった3語だが、この言葉の背後には無知の荒野を颯爽と行進する、我々の仏の兵士が何千もいる。正義の剣を彼らが運び、智慧の灯りが彼らの道を照らす。あなたは、彼らの戦いの曲と足音が聞こえるか? 彼らは仏の教えを広げ、疲れた夜の闇を明るくするために、愛の光の輝きの中で行進している。キャリア・オン、ブッセイ! キャリー・オン!」(Rev. Newton Ishiura, "Carry on, Bussei," *Unity through Gassho: First semi-annual YBA conference*, Gila River, June 20, 1943)
- 67 「アメリカの若い仏教徒である仏青会員のあなたの肩に、この国の仏教の未来がかかり、あなたに仏教の炎を燃やし続ける責任がある。これは仏教グループの努力を引き継いでいる、個々のそしてすべての仏青会員からの全面的な支援によってのみ可能である。」(Ben Tsudama, "We, the Bussei," *Unity*



- through Gassho: First semi-annual YBA conference, Gila River, June 20, 1943)*
- 68 「“Buddhism, Golden Gate to Liberty (仏教、金門橋から自由の女神へ)”を、アメリカ仏教のモットーとし、どこへ移住しても仕事をして合掌し、“南無阿弥陀仏”と高らかな念仏の声を絶やさないように！」(Editor, “Buddhism the golden gate to Liberty,” *Bussei Digest*, Vol.2-No.3, Rivers, Jul 1, 1945)
- 69 Julius Goldwater (1908-2001) : 1934年アメリカ本土で得度後、来日し1937年西本願寺で再得度する。戦時中ロサンゼルス別院の財産も管理していたが、終戦後別院は彼に不正使用があったとして1万ドル返金の訴訟を起こした。結果別院は敗訴するが、彼は教団から遠のく。しかし、1970～80年代に彼に同情をした開教使が駐在するウェストロサンゼルス仏教会で講習会を持ち、伝道活動は継続していた。(Kashima, pp. 56-57, p. 101.)
- 70 久間田顕了 (1908-1989) : 1935年得度、1938年教師、1939年龍谷大学修士課程修了、開教使になり同年妻うめのと帰米後、1940年 BMNA 本部仏青主事となる。戦後 BCA の仏教会に駐在後、1970年京都西本願寺勤務となる。
- 71 拙論 (2013) 「アメリカにおける英語真宗教学形成の一背景：欧州系仏教同調者と欧州系僧侶」『真宗研究』 57, pp. 161-179. 参照。
- 72 Kashima, p. 55.
- 73 拙論 (2011) 「ハントと浄土真宗英語礼拝聖典の成立」『印度学仏教学研究』 60(1), pp. 554-551. 参照。
- 74 注目すべきは、「the History of Buddhism」(pp. 51-66.) の、「Spread of Buddhism to the Western World」「Hawaii and America」の項目で、ハントや欧州系仏教徒の功績や、自ら立ち上げた Buddhist Brotherhood in America について言及しているが、日系人の仏教徒や教団については全く言及していないことは非常に不可解であり、戦後のロサンゼルス別院の訴訟問題はこういった経緯が背景にあるとも考えられる。
- 75 “Minutes of the emergency meeting of the Calif. Young Buddhists’ League Leaders @San Francisco, Jan 4, 1942” (BCA アーカイブ所蔵)
- 76 BCA アーカイブには、英文本部通達を添付したアメリカ海軍情報部宛書簡写し (1942年1月15日、同27日、2月9日、3月9日) と、海軍情報部 Lieutenant プラウン氏との通話記録 (1941年12月26日～3月10日) が残されている。
- 77 1941年12月10日から1942年4月18日まで、BMNA 本部から仏教会・YBA 宛に17通の英語通達が BCA アーカイブで確認出来ている。

- 78 Buddhist Mission of North America, "AMERICA MUST BE DEFENDED," December 10, 1941.
- 79 Rev. K. M. Kumata, Buddhist Churches of America, March 2, 1942
- 80 Rev. K. M. Kumata, Buddhist Churches of America, "SERVE IN SILENCE!," March 5, 1942.
- 81 Rev. K. M. Kumata, Field Executive, April 18, 1942 (to the Young Buddhist Members in the United States of America)
- 82 新しく作成された BCA by-laws (定款) 7条「メンバーシップ」の項には、教団の正会員 (Regular member) は12歳以上のアメリカ市民 (役員は21歳以上) と記し二世が新教団で中心構成員となっていたのがわかる。なお日系一世は、市民権を当時取得できなかったので準会員 (Associated member) という位置づけとなり、各仏教会の役員も同様に二世で構成するように推奨された。(Kashima, pp. 60-61.)
- 83 ただし一世や日本人開教使の中には、二世が教団・仏教会の主導権を取ることに不満を持つ者もいた。しかし、超宗派化に反対していた松陰総長が再選され、開教使も戦前の日本人が引き続き採用された上、二世はまだ年齢が若かったため、それまで仏教会で実権を握っていた一世や日本人開教使が、教団・仏教会では依然として強い影響力を持ち続け、急速な世代交代は実際にはおこらなかった。(Kashima, pp. 60-61 )
- 84 欧州系得度者のみならず、超宗派を理想的仏教とする北米・ハワイの日本人開教総長・開教使も存在していた。詳細は拙論「アメリカにおける英語真宗教学形成の一背景：欧州系仏教同調者と欧州系僧侶」参照。例として京極開教使の、「米国仏教の中核となる可きものは…各宗組独自の信念に共通し、其の奥に動いて居る積尊の教説でなくてはならない。…宗派的色彩である可きでない。」という記事がある。(『兄弟』第2巻第2号, p. 6.)
- 85 「八家九宗の合同によりて単一仏教の組織を主張するものの如きは全く救済の真理を度外視した暴論と申さねばなりません。私共は何処迄も浄土真宗の教義信仰を標榜して堂々と米国の国民性に最も順応せる四海平等の信仰を…」(「遺文 開教使殿」『松陰総長追悼号』米国仏教団 p. 7.)
- 86 その他、クリーブランド、デトロイト、ツインシティ、シーブルックに伝道拠点創設された。(BCA (1998), p. 7.)